

第1話 (3頁) ニワトリとガチョウとキツネ

家のそばにニワトリとガチョウが住んでいました。
そして林のそばにキツネが住んでいました。
そのキツネ、足はよろよろ、歯はがくがく。
ニワトリとガチョウはよろこびました。

「ニワトリとガチョウは森のキツネに食べられないか、ずっと心配だった。でも、そのキツネが年を取って自由には動けなくなった。それで、もう食べられる心配がなくなったと喜んだ。そう読むんだろうね。」

「それしかないよ。実に短くて簡潔な文章だ。」

「ニワトリとガチョウはキツネの不幸を喜んでいるだけでいいのかな。自分たちも家畜として人間に食べられちゃう運命なのに…」

「人から見て、キツネはせつかくの家畜を襲うから悪い動物。家畜は人に食べられるために飼われているのだから、そうなっても本望というわけか。」

「訳者の八島さんが新聞の寄稿で、この話を取り上げている。『そのまま素直に受け取ると、家があり集落があって、それを大きく取り巻くようにして森が広がっているという、ロシアの農村風景が浮かび上がってくる』『広々とした生活空間があり、自然な生活感情がある。つまり、これほど小さな文章でありながら、一個の世界が見事に構成されている』だって。」

「ふーん、なるほど。確かに、そんな風景が浮かんでくるなあ。」

「いきなり、第1話から含蓄の深い読み方になった。」

「ところで、キツネの方は森の中でどうなったのかな。老け込んで自然死というか衰弱死したのだろうか。」

「うーん（と大半が頷く）。天敵の動物に食べられる前に、ね。」

<参考>

八島雅彦「トルストイ作『アーズブカ』の視点」2006年1月18日聖教新聞